

Journal of Regional Development Studies

Vol.18, March 2015

Contents

[Contributed Papers for the Special Edition]

Special Issue on Volunteer Activities of University Students

IntroductionSusumu NEJIMA 1

Toyo University Student Volunteer Center's Activities in Kesenuma, Miyagi Prefecture
..... Susumu NEJIMA and Akiyo SUNAGA 3Challenge of Bridge's Volunteer Activities in Kuribayashi Temporary Housing Estate, Kamaishi
..... Atsushi KAWASUMI14The Progress of Production and Sales Project for Fair Trade Coffee in Lao PDR
..... Arihiro MINOO26

[Contributed Papers]

Global Environment Model and Climate Change Makoto IKEDA47

Japan Overseas Experiential Learning Network: Major Issues and Achievements
.....Susumu NEJIMA and Katsuki OKAJIMA65Ethical Considerations for Japanese Students Doing Short-Term Charity Work Abroad
..... Andrew OBERG77

Toward a Philosophy of Sympathy Yoichi NAKAJIMA89

An Analysis of the Educational Model around "Philosophy"
—Focusing on M.Lipman's "Philosophy for Children"— Mika YONEZU 101Analysis on Incomplete Contract under Asymmetric Information in Establishing PPP
in Irrigation System
—Referring to the Case in Philippines as an Example—Kenji YOSHINAGA 115

[Book Review]

Iwaki
By Yoshinori NATSUI and others, 2012 Susumu NEJIMA 137

国際地域学 研究

第18号
2015年3月

【特集論文】

特集：大学生によるボランティア活動

大学生によるボランティア活動 —イントロダクション— 子島 進 1

気仙沼における東洋大学学生ボランティアセンターの支援活動
..... 子島 進・須永 晃代 3

釜石市栗林町仮設団地におけるBridgeのボランティア活動 川澄 厚志14

ラオス産フェアトレードコーヒーの製造販売プロジェクトの活動経過 箕曲 在弘26

【一般論文】

気候変動と地球環境モデルについて 池田 誠47

海外体験学習の多様性と可能性

—これまでの10年・これからの10年— 子島 進・岡島 克樹65

Ethical Considerations for Japanese Students Doing Short-Term Charity Work Abroad
..... オバーク・アンドリュウ77

共感の思想に向けて 仲島 陽一89

「哲学」を起点とした教育モデルに関する基礎的研究

—M.リップマンの「子どものための哲学」に着目して— 米津 美香 101

Analysis on Incomplete Contract under Asymmetric Information in Establishing PPP
in Irrigation System
—Referring to the Case in Philippines as an Example— 吉永 健治 115

【書評】

Iwaki
By Yoshinori NATSUI and others, 2012 子島 進 137国際
地域
学
研
究第
18
号東洋
大学
国際
地域
学部Published by
The Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

東洋大学国際地域学部



東洋大学

特集：大学生によるボランティア活動

大学生によるボランティア活動—イントロダクション—

子 島 進*

本特集は、3つの論文で構成されている。すなわち、子島進・須永晃代『気仙沼市における東洋大学生ボランティアセンターの支援活動』、川澄厚志『釜石市栗林町仮設団地における Bridge のボランティア活動』、そして箕曲在弘『ラオス産フェアトレードコーヒーの製造販売プロジェクトの活動経過』である。

子島・須永論文は、気仙沼市における東洋大学学生ボランティアセンター（以下、学ボラ）の活動について論じている。東日本大震災を契機とする学ボラの支援活動を概観したうえで、中心メンバーへの集中的なインタビューから、その成果と課題を明らかにする。

川澄論文は、Bridge の活動を取り上げる。Bridge もまた、東日本大震災をきっかけに立ち上がった東洋大生のボランティア団体である。岩手県釜石市栗林町を主な対象とし、販路確保を通じた交流活動を展開している。被災者や復興関係者らとの間で持続的な交流を目指しており、ハンドクラフト製品の販路確保支援を通して、被災地の現状に関するヒアリングや座談会なども行ってきた。川澄論文では、2013年度の Bridge における支援活動の成果と課題を明らかにする。

箕曲論文の主題は、大学生が中心となって運営するフェアトレード・ドリップパックプロジェクト（以下、ドリプロ）の活動である。ドリプロは、ラオス産のフェアトレードコーヒーの製造販売に自ら関わっている。その活動経過を通して、大学生がフェアトレードの普及に関わる意義、ならびに参加者の学びの性質について考察していく。

本特集を組むことになった経緯を簡単に記しておきたい。近年、大学教育においても、現場での「体験学習」を重視する方向性が明確になってきた。インターンやボランティア活動に単位が付与され、条件を満たせば奨学金が支給されるなど制度化も進んでいる。筆者3名はいずれも東洋大学の教員であり、学内外でのボランティア活動が年々盛んになっていく様子を目の当たりにしてきた。体験学習が「主流化」していく中で、よりいっそうの学びの質の向上を図るためには、議論の基礎資料となる活動を記録しつづける必要がある。このような観点からの特集であるが、すでに2013年の『国際地域学研究』16号において、「地域から学ぶ／地域とともに学ぶ—東洋大学における現場主義の試み—」と題した特集を組んでおり、今回は2回目となる。今後もこのような形で、学生のさまざまな活動を記録し、学びの質の向上を図るための手がかりとしていきたい。そして将来的には、1冊の論文集にまとめられればと考えている。

* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

Special Issue on Volunteer Activities of University Students Introduction

Susumu NEJIMA

This special issue on Volunteer Activities of University Students is comprised of three papers. The first paper “Toyo University Student Volunteer Center’s Activities in Kesenuma, Miyagi Prefecture” is written by Susumu Nejima. Nejima describes TUSVC’s various activities from March 2011 to up to March 2013. His paper sheds light on problems and achievements of student volunteers.

Atsushi Kawasumi writes on “Challenge of Bridge’s Volunteer Activities in Kuribayashi Temporary Housing Estate, Kamaishi.” Bridge is another Toyo University student organization, and their purpose is to build sustainable exchanges between the affected people and the stakeholders concerned with disaster reconstruction.

The third paper is “The Progress of Production and Sales Project for Fair Trade Coffee in Lao PDR” by Arihiro Mino. Fair Trade Drip Pack Project was established in 2011 in order to promote fair trade to the Japanese university students by producing and selling coffee which is imported from Lao PDR. Mino focuses on the activities of “the study tour” that the members visit the coffee farming area of Laos, through the descriptions of the participants’ experiences.

The three authors point out the important issues for sustainable student activities through observations and interviews.

Book Review

Iwaki

By Yoshinori NATSUI and others, 2012, Aizu-wakamatsu: Rekishishunjyusya,
156 pages.

Japanese title: Iwaki

Susumu NEJIMA*

This book is from Iwaki, Fukushima Prefecture. If you are outside Japan, you may not know the current situation in Iwaki. The 311 Quake and tsunami deprived of more than 400 lives, and nearly 8,000 houses were destroyed in the city. In addition, Iwaki has accepted as many as 23,000 evacuees from no-entry zone around the Fukushima No.1 nuclear power plant. Even in Japan, we have less and less news about the affected areas of the 311 disasters. How are they doing now?

This book demonstrates Iwaki people's resilience to disasters. In collaboration with dozens of organizations, local writers make commentary on such diverse topics as natural history, medieval history, folk art, modern art, literature, places of historic interest and new attraction, and of course, local dishes.

This book was originally planned to record the long history and people's life in Iwaki, before the 3/11 disaster occurred. Though the editing operation was suspended due to the disaster, editors and writers carried out their original purpose. The contents remain as of 2010 in order to avoid being another disaster book.

They are successful in the attempt. This is the first class cultural guide book for Iwaki. Keeping this book with me, I really want to visit Sedogaro, a narrow gorge with a stream running through it. I want to see Shishimai or folk dance with a lion's mask. And I want to enjoy a good concert at Iwaki Performing Arts Center Alios. My son's choice is Iwaki ammonite center. He is interested with animals and plants of past geological periods, and Iwaki is full of materials of paleontology!

Iwaki is also known as a place of art and literature. This city has a free atmosphere, and people have never hesitated to introduce new art movements. At the same time, they are eager to preserve folk tradition such as Jangara, a kind of Buddhist incantation using chanting, drumbeating, and dancing.

The local writers' confident way of writing demonstrates love for their hometown. After reading this book, one must be convinced that their confidence is well founded.

* 東洋大学国際地域学部 : Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

東洋大学国際地域学部国際地域学科紀要 編集規定

第1条（目的）

東洋大学国際地域学部紀要『国際地域学研究』（以下「紀要」という）は、国際地域学部の教育と研究を促進し、教員の研究成果発表の場として、さらに「国際地域学」のディシプリン形成とその発展に寄与することを目的とし、関連の論文、研究ノート、書評、研究展望等を掲載発表する。

第2条（投稿資格）

「紀要」に投稿できる者は、次のとおりとする。

- (1) 国際地域学部の専任教員
- (2) 国際地域学部の非常勤講師
- (3) その他「紀要」編集委員会が適当と認めた者

第3条（申込みと締切）

執筆申込みと締切期限は、年1回発行の場合は次の各号のとおりとし、年2回発行の場合は、その都度別に定める。

- (1) 執筆計画を把握するため、別に定める「紀要執筆計画アンケート」を7月末日までに集める。
- (2) 原稿提出は、12月1日までとする。
- (3) 上記(1)、(2)の提出先は、「紀要」編集委員会とする。

第4条（原稿の種類）

この「紀要」に投稿できる原稿の種類は、次のとおりとする。

種 類	内 容
査 読 論 文	オリジナルな研究成果をまとめたもの（査読付）
論 文	オリジナルな研究成果をまとめたもの
研 究 ノ ー ト	研究の中間報告、覚書及び新しい研究方法についての報告、翻訳
書 評	書籍、文献の批評、紹介
研 究 展 望	それぞれの研究分野の成果をまとめたもの、研究動向を展望したもの
学 部 活 動 記 録	当該年度の学部活動を報告する内容のもの

第5条（執筆要領）

原稿の執筆にあたっては、別に定める「紀要」執筆要領と「査読」要領による。

第6条（補筆と修正）

「紀要」編集委員会は、必要に応じて、著者に補筆や修正を求めることができる。

第7条（原稿の返却）

投稿された原稿は、著者に返却する。

第8条（抜刷り）

著者には抜刷りを50部配布する。

第9条（配布先）

「紀要」の配布先および電子媒体を通じての公開先は、編集委員会が別に定める。なお、「紀要」

は東洋大学学術情報リポジトリに登録され、公開される。

第10条（原稿料など）

原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。査読者に対して謝礼を行う。

第11条（改正）

この規定の改正は、国際地域学部教授会の議を経て「紀要」編集委員会が行う。

附則

この規定は平成21年9月3日から施行する。

この規定は平成25年3月8日に改正した。

東洋大学国際地域学部国際地域学科紀要 原稿執筆要領

平成9年6月26日 学科会議了承

1. 使用言語および使用ソフト

使用言語については特に制限はしない。ただし、印刷等に当たり特別の技術その他の事情を有する言語については、事前に編集委員に相談すること。

原稿は原則としてワープロ打ちとする。使用ソフトはウィンドウズ系一太郎またはMSワードとするが、それ以外のソフトを使用するときには事前に編集委員に届け出ること。

2. 執筆者

投稿資格は本学部の専任教員および非常勤講師とするが、共著者がいる場合は氏名の右肩に*印を付けて示すこととする。

3. 要旨およびキーワード等

原稿の本文が日本語の場合には、英語の表題、著者名、要旨およびキーワードをつけること。原稿の本文が英語またはその他の言語の場合には、各言語の要旨、キーワードの他に、日本語の表題、著者名、要旨およびキーワードをつけること。

4. 本文および脚注・注

本文は原則として横書きとし、英語の場合はダブルスペースで記述する。原稿用紙のサイズはA4サイズを標準とする。長さは日本語の場合はA4用紙30枚を超えない程度とする（いずれの場合も図表を含むものとする）。他の言語の場合もこれらに準ずる。以上の内容に依りがたい時は編集委員と協議して決めることとする。

脚注は、本文中の該当箇所の右肩に一連番号を打ち、注そのものは当該ページの下部に記入する。各章毎、あるいは本文末に注をまとめる場合も、注番号は当該箇所の右肩に一連番号で示すこととする。

5. 参考文献

参考文献は、原則として以下の要領で記載する。

(1) 和文の参考文献（翻訳を含む）の場合

1) 雑誌

著者名、表題、雑誌名、巻数（号数）、（刊行された西暦年）

2) 単行本

著者名、書名、発行所、ページ数（号数）、（発行された西暦年）

3) 編著書の中の1章またはシリーズの中の1巻

著者名、章名、编者（または監修者）名、書名、発行所、ページ数、（刊行された西暦年）、または著者名、書名、编者（または監修者）名、シリーズ名、第XX巻、発行所、ページ数、（刊行された西暦年）

4) その他の参考文献については、上記1)、2)、3)に準ずる。

(2) 欧文等の参考文献の場合

上記(1)に準ずる。ただし、書名などについては、主な言語(Word)、固有名詞などは大文字で書き始めること。

6. 図表

- ① 図は著者の作成したものをそのまま印刷するので、黒インクで浄書(トレース)すること(ワープロ印刷でも可)。トレース等が困難な場合にはトレース料は自己負担とする。
- ② 図は、なるべく白紙に黒インクで大きめに書くこと。また、各図は一枚毎に別々の用紙に書くこと。
- ③ 図中の文字数等は写植されるので、正確に書くこと。大文字と小文字、イタリック体、ゴチック体などの違いにも注意すること。
- ④ 図(写真を含む)および表には必ず名称をつけること。
- ⑤ 図表の番号は、それぞれが本文に現れる順にしたがって、通し番号でつけること。また、本文中の各図表の挿入箇所は明確に指示すること。
- ⑥ 各図表の作成に使用した資料あるいは文献は、必ず注として明記すること。

7. 原稿の提出

原稿は本文のハードコピー1部およびFDに収録したもの(ワープロのフォーマット形式およびテキスト型式の両方)で編集可能なものに、それぞれ一枚ずつ別々の用紙に作成した図表をつけて提出するものとする。

東洋大学国際地域学部紀要編集委員会

委員 坂元浩一

池田誠

矢ヶ崎紀子

国際地域学研究 第18号

平成27年3月18日発行

編集・発行 東洋大学国際地域学部
〒112-8606
東京都文京区白山5-28-20
Tel (03) 3945-8562

印刷 蔦友印刷株式会社
〒113-0001
東京都文京区白山1-13-8
